

1.はじめに

おはようございます。

前回、イエス・キリストの十字架について考えるというテーマで、4つのポイントからお話をさせていただきました。

1)十字架を身近に感じることができるか? : 十字架は教会にかけられているモニュメントではなく、自分自身にとって最も身近に感じることができる、神と私を結びつけるための架け橋である。

2)十字架上の7つのことば : イエスの十字架上で7つのことばは次の通りです。

ルカ 23:34 「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」

ルカ 23:43 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

ヨハネ 19:26-27 「女の方。そこに、あなたの息子がいます」…「そこに、あなたの母がいます」

マタイ 27:46 「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」(わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか)

ヨハネ 19:28 「わたしは渇く」

ヨハネ 19:30 「完了した」

ヨハネ 23:46 「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」

3) 「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ 23:34)

神と人との間に入って、人のためにとりなすことができるのは、神のひとり子であるイエス・キリストだけでした。また、父なる神に対する影響力があり、人が持つ罪の問題を解決できるのは、イエス・キリストだけでした。

4) 「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」ルカ 23:43
人生の最期で、多くの罪を犯した自分自身の人生を心から悔い改め、イエスを自分自身の罪からの救い主として信じた罪人に対して、イエスは同じ十字架の上から、あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいる、あなたは救われた、ということをはっきりと告げられました。神は確かに、イエスを救い主として受け入れ、信じる人に対しては、語りかけてくださり、救いを与えてくださる方です。

このようなポイントについてお話しさせていただきました。

今日は、イエスの十字架上のことばのうち、ヨハネ 19:26-27 「女の方。そこに、あなたの息子がいます」…「そこに、あなたの母がいます」、についてお話しさせていただきたいと思います。

2.「女の方。そこに、あなたの息子がいます」…「そこに、あなたの母がいます」(ヨハネ 19:26-27)

ヨハネの福音書 19:26-27 をお読みします。

19:26 イエスは、母と、そばに立っている愛する弟子とを見て、母に「女の方。そこに、あなたの息子がいます」と言われた。

19:27 それからその弟子に「そこに、あなたの母がいます」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った。

福音書に教えられているイエスのことは、話は、聞き手、受け手にとってわかりやすいものもあれば、わかりにくいものもありました。例えば、ヨハネの福音書 3 章に登場するニコデモとの会話は、ニコデモにとっては大変難解な、難しい質問であったようです。少し長いのですが、ヨハネの福音書 3:1-15 をお読みしたいと思います。

3:1 さて、パリサイ人の中にニコデモという人がいた。ユダヤ人の指導者であった。

3:2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられるのでなければ、あなたがなされるこのようなしるしは、だれも行うことができません。」

3:3 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

3:4 ニコデモは言った。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎に入って生まれることができますでしょうか。」

3:5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。」

3:6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

3:7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っはなりません。

3:8 風はその思いのままに吹き、あなたはその音を聞くが、それがどこから来てどこへ行くかを知らない。御霊によって生まれる者もみな、そのとおりです。」

3:9 ニコデモは答えて言った。「どうして、そのようなことがありうるのでしょうか。」

3:10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こういうことがわからないのですか。」

3:11 まことに、まことに、あなたに告げます。わたしたちは、知っていることを話し、見たことをあかししているのに、あなたがたは、わたしたちのあかしを受け入れません。

3:12 あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。

3:13 だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。

3:14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない。

3:15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

私自身も、聖書を読み始めた頃は、イエスとニコデモとのやりとりは何のことだかさっぱりわかりませんでした。ただ、イエスはニコデモの質問や言葉にそのまま答えるのではなく、今、ニコデモが知り、理解し、受け入れるべきことを、ニコデモの質問に答えるという形を通して示されているようです。欲しがっているものをそのまま与えるのではなく、必要なものを与える。こんなことが即座にできるのが、イエスは人ではなく神であることの一つの象徴のように思います。実際、ユダヤ人の指導者であり、パリサイ人であるニコデモは、この後も聖書に何度か登場しますが、私は、ヨハネの福音書 20 章に教えられている、彼がイエスを埋葬するために、30 キロもの没薬を持ってゴルゴダの丘を登ってやってきた記事を読むたびに、公にはイエスに関する自分

自身の考え方を表明する勇気はなかったものの、イエスこそ本当の神であることを受け入れていたことを感じます。つまり、ニコデモの質問に対して、正解を答えるのではなく、やがてニコデモがイエスを信じ受け入れるために必要なことを、彼がまだ十分に理解できていない段階で示されたということかと思います。

イエスとニコデモとの会話の中に、イエスの深い配慮があったことを前提に、マリヤ、ヨハネに対するイエスの言葉を考えてみたいと思います。

3.女の方。そこに、あなたの息子がいます（ヨハネ 19:26）

イエスとイエスの母マリヤとの関係は、普通の母子の関係とは違う面がたくさんありました。イエスがキリスト、救い主であるということで、マリヤの人生は翻弄されました。その翻弄された33年の結末がこの十字架です。しかも、この後も十字架にかけられたイエスの母、という事実を背負って生きていかなければならない。このことを考えるだけでも、マリヤの人生が大変重いものであったことがわかります。

十字架の下から、両手、両足に釘を打たれ、全身から血を流し、今にも息が絶えそうな息子であるイエスを見て、母であるマリヤは何を想い、何を感じていたのか。イエスとともに十字架につけられている犯罪人の1人からは悪口を言われ、十字架を取り巻く多くの人たちからは、罵倒を浴びせられ、誰一人イエスを救おうとしない中で、何もできないマリヤは何を想い、何を感じていたのか。想像に絶することです。

皆さんの想像力を最大限に活用していただいて、このマリヤについて、想像していただきたいと思います。この十字架の下からイエスを見て、彼女はどのような想いを持っていたのか。

このマリヤに対して、イエスは一言だけ言葉をかけられました。それが、女の方。そこに、あなたの息子がいます、という言葉でした。

マリヤとイエスは母子という関係でしたが、それ以上に、救い主と罪人という関係でもありました。マリヤはイエスをいつも二つの視点、二つの立場で遠くから見守っていたと思います。イエスは我が子であり、イエスは我が主である。いつも、マリヤはこの二つの視点でイエスを見ていました。しかし、イエスが最期にマリヤにかけた言葉は、非常に絶妙でした。イエスは、マリヤを母とは呼びませんでした。女の方、と呼ばれました。母の立場で考えるならとても冷たい響きかもしれませんが、イエスはまずマリヤとの関係において重要なことは救い主と罪人という関係であることを示されました。マリヤにとって、イエスは我が主なのだ、ということを明確に示されたのです。その上で、イエスはマリヤにイエス亡き後の「息子」として、ヨハネを示されました。イエスから、その息子を示される必要があった女性はまさにマリヤだけでした。マリヤにとって我が子であるイエスは、その人生の最期に、我が子としての責任をヨハネに託されたのです。マリヤの人間的な感情が、すぐさまこのイエスの言葉によって解決することはなかったと思いますが、この一言の中に、イエスがマリヤに伝えなければならなかったことがみごとに凝縮されています。我が子であり、我が主であるイエスが、その人生の最期に、マリヤの中にいつも輻輳していたイエスに対する視点、立場を、たった一言で解決されたのです。

同時に、イエスの弟子の中で、おそらく唯一十字架の下にまでやってきた弟子のヨハネは、突然イエスの母マリヤを自分自身の母とするように、イエスに言われます。

4.そこに、あなたの母がいます。（ヨハネ 19:27）

ヨハネにとって、マリヤを母として託されることなど、想像もしていなかったと思います。また、ヨハネには実の母が生存していることが、マタイの福音書20章に教えられています。ヨハネの母は、ヨハネとその兄弟ヤコブが「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりあなたの右に、ひとは左にすわれるようにおことばを下さい。」とイエスにお願いした、と教えられています。他の弟子たちの父や母がイエスと会うことがあったのかどうか、聖書には教えられていなかったと思います。ペテロの姑の熱病を癒された記事がありますので、ペテロの親には会ったことがあるかもしれません。

ヨハネにとって、マリヤを母として託されるということは、大変重たいことであつたと思います。ヨハネは漁師でしたが、イエスの弟子となつたことでその仕事を捨てていました。もちろん、自分の母もいます。一生、イエスについていこう、従っていこうという気持ちを持っていたと思いますが、そのイエスが今自分の目の前で最期を遂げようとしている。この後、ヨハネ自身はどうやって生きていけば良いのかもわからない状況です。しかも、イスラエルにはイエスに対して反抗的な、否定的な人はいても、肯定的な人はほとんどいない。そればかりか、その最期を最も重たい刑である十字架の上で迎えようとしている。このような状況下で、突然マリヤを母として託されるのですから、ヨハネは相当混乱したと思います。つまり、ヨハネにとって、マリヤを母として迎え入れるのは、想像もしない、重たい、混乱するようなことであつたのです。

しかし、聖書を最後まで読めばわかりますが、ヨハネは初代教会の時代に大変重要な働きをしました。残念ながら、当時のイスラエル、ローマは、イエスに対しては大変反抗的でした。初めにイエスのことを宣教した使徒たち、またパウロに代表されるようなイエスを神と信じる人たちは、迫害され殺されました。伝承によると、斜めの十字架や逆さの十字架につけられたり、首をはねられたりしたようです。その中で、ヨハネだけは迫害をうけつつも、長寿を全うして死んだようです。それは、ただ長寿であつてよかつたということではなく、次の世代にイエスのことを教え、教会を育み、神にある本当の信仰を伝えるために、ヨハネだけがこの地上での命を守られたと理解すべきだと思います。そのヨハネにとって、イエスを伝え教えるために、このマリヤを母として託されたことは非常に重要な使命でした。なぜなら、イエスについて、マリヤしか知らない、マリヤしかわからないことがたくさんあつたからです。マリヤは御使いガブリエルからの受胎告知を受けました。同じように神から命を授かつた祭司ザカリヤと妻エリサベツに会い、マリヤの中に与えられた命がどれほど重要な命であるのかを聖霊によって教えられました。イエスが生まれたとき、東方の博士たちや羊飼いたちがその誕生を祝いにやってきたこと、またヘロデ王に追われてエジプトに逃げたこと、イエスが12歳のとき、祭りのためにエルサレムに行った後、イエスが行方不明になり、教師たちに話を聞いたり質問したりしていたこと。このようなことは、マタイやルカがその福音書の中に教えていますが、それを直接、最も近いところで当事者から聞くことができたのは、このヨハネです。初代教会の基礎を作り、神にある真実、すなわちイエスこそ神のひとり子であり、全人類の救い主としてこの世に現れて下さつた方であり、十字架、葬り、よみがえりを通して私たちに罪からの完全な救いを与えてくださった方であることを、当時の世界にあまねく伝えるという重大な役割を果たすために、ヨハネがマリヤを母として託されたことは非常に重要な意味があつたと思います。

5.マリヤとヨハネは、後から理解したことがあつた。

このような重要な意味は、ヨハネは後になって理解したかもしれません。マリヤを託された時は、想像もしない、重たい、混乱することではなかつたかもしれません。しかし、私たちはイエスが教えられた言葉を大切にすべきだと思います。

ヨハ 13:7 イエスは答えて言われた。「わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。」

今わかりたい、今わかれば平安を持つことができる。今わかれば信じることができる、と思いがちですが、イエスは、あとでわかるようになることがある、と教えられました。今、すべてのことがわかるなら、理解できるなら信仰は不要です。しかし、今わからなくても、神を信じて目の前の事実や環境を受け入れることが信仰です。神はわたしたちに良くしてくださらないことはありません。神はいつも私たちに良くしてくださる方です。たとえ、目の前の事実や環境が困難や苦しみであったとしても、神の視点では私たちがより大きな幸せを手にするために必要なプロセスであるはずで、どうして?と思うことはたくさんありますが、今わからなくても、いつか必ずわかる日が来る、そう信じてすべてを受け入れることが信仰です。

ヨハネは、自分自身だけが生き長らえるとは思っていなかったと思います。そういうことを期待できるような時代ではなかったからです。自分の兄弟だけでなく、仲間である使徒や多くの信者たちが、虫が殺されるようにどんどん殺されていくような中で、自分だけが生き長らえ長寿を全うするなど、まったく考え及ばなかったと思います。しかし、その人生において、ヨハネの晩年において、誰もイエスに会ったことがない時代を迎えて、自分自身がマリヤを母として迎え入れたことや、何よりもイエスを自分自身の目で見、ともに過ごしてきた経験がいかに重要であったか。彼はおそらくイエスとともに過ごした最後の 1 人となって、初めて自分の経験の重要性を思い知らされたかもしれません。それは、初めからわかることではなかったのです。後にならないとわからない。ヨハネは、自分自身の長い人生を通して、このイエスの言葉とその言葉にかけた信仰、その醍醐味を学ぶことができた大変貴重な存在であったと思います。

そして、このような信仰はヨハネだけでなく、イエスの母マリヤこそその信仰を最初に、しかも人生において繰り返し体験させられたと思います。

イエスが生まれて、八日目の割礼のためにエルサレムに行ったヨセフとマリヤに対して、シメオンというエルサレムにいた、正しく敬虔な人が、イエスを抱き、その将来についてこのように預言しました。ルカの福音書 2:34-35 をお読みします。

2:34 また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。

2:35 剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現われるためです。」

福音書を読めば、また新約聖書を読めば、このシメオンの言葉はよく理解できますが、ほんの 1 週間前に生まれた幼子イエスに対する預言としては、大変厳しい言葉ではないでしょうか。彼女はこの預言を大切に、自分の中に留めていたと思います。多くの人の思いがあふれ、罪が沸騰し、イエスに対して、除け、除け、十字架につける!という叫び声、罵倒が渦巻く中で、マリヤはヨハネと他の何人かの女性とともに十字架の下にいました。シメオンの言葉は、ここに至って現実となりました。それは、人間的に考えれば最悪の現実です。この最悪の現実さえも、マリヤは受け止めていました。あとになってわかる。そのわかった事実が最悪と思えることであっても、神にあって受け止める。マリヤにとって、十字架は突然やってきた不幸ではなく、33 年前にシメオンによって預言されたことの成就であったはずで、

繰り返しますが、どうして?と思うことはたくさんあります。残念ながら、私たちにとって不幸と思えること

は思いがけないときにやってきます。しかし、今その意味がわからなくても、いつか必ずわかる日が来る、そして、それは必ず私たちにとって良い経験として作用する日が来る。それは、神が私たちを見捨てることは決してないからだ。そう信じてすべてを受け入れることが信仰です。

ヨハネは、その長い人生の中で、多くの苦難、試練を経験しました。初代教会の時代、迫害を受けなかった人はいなかったのです。そのような環境下で、ヨハネは繰り返しその信仰を試されたと思います。それでも、お前はイエスを神として信じるのか。救い主として信じるのか。

この厳粛な質問に対して、ヨハネは自分自身が書いた福音書でこのように教えています。最後に、ヨハネの福音書 20:29-31 と 21:24-25 をお読みしたいと思います。

20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

21:24 これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている。

21:25 イエスが行われたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う。

トマスに対して、見ずに信じる者は幸いです、と教えられたイエスの言葉に加えて、ヨハネはこの福音書には書ききれなかったもっとたくさんの事実があったことを教えています。そして、書かれた事実一つ一つは、私たちが神の子キリストであることを信じるため、また、信じて、イエスの御名によっていのちを得るためであると教えました。見たから信じることはできない。見ずに信じるのが幸いである。見ずに信じるということは、言い換えれば今わからなくても、後で必ずわかるようになる、ということでもあります。見ていないものが、あたかも見たかのような現実味を持って体験できる日が来る。見えて理解できて安心できるのは当たり前です。見えるから、理解できるから安心できるのではなく、見えなくても、理解できなくても安心できる人生こそ、神にある信仰を持つ人生です。

今日、皆さんにとって、見えなくても、理解できなくても安心できる人生の転機となることをお祈りして、お話を終えたいと思います。お祈りしましょう。